

## 122 伊達政宗の母公は最上義光の 姉か妹か

問 「仙台人名大辞書」の「伊達政宗」の項に『母は出羽の守義光妹』とあり、同書の「伊達小次郎」<sup>(1)</sup>  
〔政宗の実弟〕の項には『〔保春〕夫人〔政宗の母〕の弟最上義光』とあります。政宗の母は、最  
上義光の姉なのか、妹なのか、そのどちらでしょうか。<sup>(2)</sup>

答 現存する図書資料の中に、伊達政宗の母公と最上義光との続柄を、姉弟の関係とするものも、逆  
に兄妹の関係とするものも、古くから同在しています。これは、原拠とした資料が、それぞれ異質  
のものであったことによります。しかも、それら二元の資料が、ともに公的な尊厳をもつ故に、吟  
味や論評抜きで通用し、そのままに伝存され、引用されてきたものであります。そこで、両説の当  
否を見据える手がかりを探究する段階として、このことに関する図書資料を類別整理すると、次の  
ようになります。〔フィクションも大衆への影響力が大きいので含めます。〕

まず、同一著作の中で、政宗の母公と最上義光との続柄を姉（弟）、（兄）妹と相反する関係を  
混在させたままに書かれている内容不統一ともいふべき図書資料には、お尋ねの「仙台人名大辞書」  
のほか、次のようなものがあります。これらを、便宜上第1類と類別します。

1. 「伊達便覧志」（佐久間洞巖、「仙台叢書」第3巻の内）

『政宗母最上義光姉……』

『伊達輝宗〔政宗の父〕室義守女義光妹』

2. 「青史端紅」（高柳光寿）

『輝宗の妻は最上義光の姉で政宗の母であるが……』

『文禄元年〔1592〕6月政宗は肥前名護屋の陣中から手紙を東殿〔政宗の母〕にやっている  
がその中で、御あに〔兄〕様〔最上義光〕に度々会って……』

次に「伯父」〔父又は母の兄〕、叔父〔父又は母の弟〕の続柄用語を同一著作中に無差別に用い  
ているため、誤解を生ずるような記述になっているものに、次の諸書があります。これらを第2類  
とします。

1. 「成実記」（伊達成実、「仙台叢書」第11巻の内。「伊達史料集」上）

『最上義顕〔光〕公は政宗公の伯父〔母の兄〕に而……』<sup>(3)</sup>

『政宗公御老母は御東の上と申、義顕〔光〕御姉に御座候……』

2. 「奥羽史談」（鈴木省三）

『義光ハ我が〔政宗〕叔父〔母の弟〕ナリ……』

『伊達政宗ハ義光ガ妹ノ生ム所ナリ、義光……其妹ヲシテ之ヲ謀ラシメ……』

『〔政宗〕曰ク義光ハ余ガ叔父〔母の弟〕ナリ、小怨ヲ以テ大義ヲ棄ツ可ラズト』

また、政宗の母公を最上義光の姉と明記したものに、「貞山公治家記録」巻之13（諸臣等奉君命撰）があります。その天正18年4月7日条に『御母公今度不義ノ事ヲ企テ玉ヘル由来ハ、御弟最上出羽守義光ノ肝悪ヨリ起レリ』とあります。次の諸書は、すべてこれを典拠としたか、更に孫引きしたものであります。これらを第3類とします。

1. 「伊達治家記録」2 解説（平 重道）

『最上夫人が毒殺を謀ったのは、弟の最上義光に唆かされたためで……』

2. 「東藩史稿」巻之3（作並清亮）

『……保春夫人ノ弟最上義光夫人ニ説テ……〔治家記録に依る〕』

3. 「伊達政宗・戊辰戦争」（平 重道）

『生母最上夫人……弟最上義光の……』

4. 「伊達政宗」（平 重道、「大名列伝」2の内）

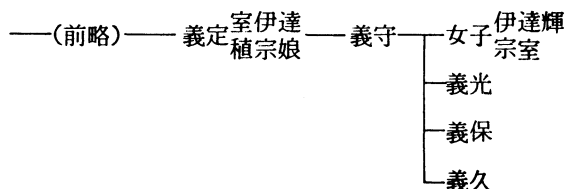
『生母最上夫人……弟最上義光の……』

5. 「近江日野町志」巻上（滋賀県日野町教育会編）

『山形出羽守義秋〔光〕は源家の胄にして而も政宗外戚の叔父〔母の弟〕なれば政宗の上席たるべしと……』

6. 「伊達治家記録」1（平 重道編）

『最上氏系図〔原本にはなく編者の添加したもの〕』



〔『寛政重修諸家譜巻80最上氏系譜による』と編者註があるが、昭和39年続群書類従完成会発行の新訂版によれば、女子と義光の序列が反対である。〕

7. 「白石市史」1（白石市）

『政宗毒殺未遂事件……は生母保春院（最上義光の姉、義子）の計画といわれ……』

8. 「水沢市史」2（水沢市）

『政宗の母である最上氏（最上義守女・義光の姉・保春院・御東）の取りはからいで……』

9. 「山形県の歴史」（山形大学附属郷土博物館編）

『彼〔政宗〕は義光の甥にあたっている。……叔父〔母の弟〕甥の間が仲悪くなった。』

『〔慶長5年〕山形城は腹背に敵を受けて存亡の危機に立っていたのである。義光は直ちに長子義康を遣わして岩出山城主伊達政宗に援助を頼んだ。政宗の母は義光の姉でこの時山形に滞在していた。』

10. 「戦国武将の書簡」2（桑田忠親）

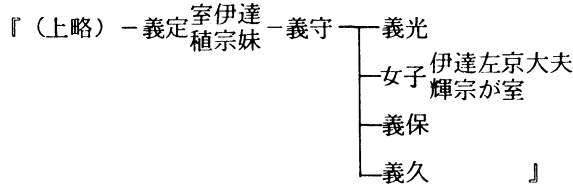
『政宗の生母御東（保春院）……御東は最上義光の姉で……』

11. 「奥羽軍談」巻之8（健之院信弁）

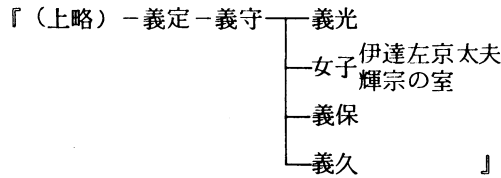
『奥羽の大守輝宗の北ノ方は、義光大守とは姉君なれば……』

『輝宗の北ノ台と申は山形殿には姉君也』

最後に、政宗の母を最上義光の妹とするものに「寛政重修諸家譜」巻80の中「最上氏系譜」があります。すなわち



同じく「藩翰譜」（新井白石）があります。



このほか、次のような諸書があり、これらを第4類とします。

1. 「伊達政宗卿伝記史料」（藩祖伊達政宗公顕彰会編）

『〔文禄元年〔1596〕6月〕

是月 母公ニ音信ス〔某氏所蔵文書〕〔前略〕

— 御あに〔兄〕さま〔最上義光〕にはさいさいあい申候〔下略〕』

2. 「政宗記」巻7（伊達成実、「仙台叢書」第11巻の内。「伊達史料集」上）

『義光の妹は政宗の母儀にて東の上と号す』

3. 「伊達天正日記」12（「伊達史料集」下の内、小林清治校注）

〔天正18年4月7日条の校注者注記〕

『同夜、保春院は兄最上義光の居城山形に逃がれた。……』

4. 「伊達秘鑑」巻之9, 35（半田通時、「仙台叢書」〔別刊〕の内）

『伊達輝宗モ義光妹智ナレトモ……』『政宗ノ母公ハ最上義守ノ息女、出羽守義光ノ妹也』

5. 「伊達政宗卿」（藩祖伊達政宗公三百年祭協賛会編）

『伊達政宗公は……永禄10年〔1567〕8月3日、伊達氏16世輝宗（性山）公の長子として米沢城（矢子城）に於て誕生した。母公は山形城主最上義光（よしあき）の妹義姫（後の保春院）である。この時父公は24才、母公は20才であった。』

6. 「伊達政宗」（小林清治）

『……保春院の兄最上義光……』

7. 「仙台先哲偉人録」（仙台市教育会編）

『伊達政宗……母は山形城主最上義光の妹義姫（後の保春院）である。……伯父〔母の兄〕最上義光……』

8. 「仙台士鑑」（矢野顕蔵）

『元和6年〔元和8年〔1622〕の誤〕最上氏亡ふ。徳川氏兵を遣して封土を収む。公亦た命ありて之に与る。……時に太夫人最上氏、山形に在り。公使を遣はして之を迎へしむ。公太夫人を遇する尤も孝謹を致す。太夫人は義光の妹なり。』

9. 「宮城県史」1

『政宗が母親（保春院夫人—最上義守の女子）……彼女は兄の最上義光の謀略にかゝって……』

10. 「宮城県史」2

『伊達政宗は、永禄10年〔1567〕8月3日、伊達氏16世輝宗（性山）の長子として米沢城に生れた。母は山形城主最上義光の妹義姫（のちの保春院）である。』

11. 「伊達政宗展〔図録〕」（仙台市博物館）

『最上義光……義光の妹、義姫は、米沢の伊達輝宗の妻となり政宗、小次郎の母となった。……はじめは大輝宗と兄〔義光〕の確執に、今また兄と子政宗との争いに、両家和解のために……』

12. 「伊達政宗卿の少年時代」（小島甲午郎、「宮城教育」第432号<伊達政宗公三百年祭記念号>の内）

『御母は山形城主最上義光の妹（義守の女）義姫（後の保春院で……）』

13. 「米沢市史」（米沢市）

『弱冠克く古豪に伍して、嶄然頭角を露し、その兵を用ふること慄悍、奥羽の野を横行する恰も無人の野を往くが如く、諸豪をして屏息畏怖せしめたる者、実に独眼竜<sup>(5)</sup>將軍、伊達17世貞山政宗なりとす。政宗は今を距ること374年前〔昭和16年起算〕即ち、永禄10年8月3日、米沢城に呱呱の声を挙ぐ、母は山形城主最上義守の女なり。（最上義光の妹）』『政宗乃ち天下の大勢を洞察して遂に意を決して將に太閤の麾下に参ぜんとす。偶々一椿事勃発す。其母（最上義光の妹）政宗の弟小次郎を愛し窃に彼を毒殺せんと謀る。事顕れて、小次郎誅せられ、母最上氏に走る。……独眼竜政宗は実に米沢の生みたる英傑なり。』

14. 「村田町史」（村田町）

『政宗の母は、山形の最上義光の妹であり、……天正18年4月……権謀術策に長じている最上義光が妹保春院をそそのかし……毒殺をすすめたという。』

15. 「伊達政宗」（渡辺義顕）

『母義姫は……輝宗の家兄義光と戦ふや……』

16. 「伊達政宗公」（斎藤莊次郎）

『政宗は……義光は我が伯父〔母の兄〕で亦母も最上氏に拠っている。』

17. 「日本武将列伝」4（桑田忠親）  
『最上義光……政宗の母、義姫……最上義光の妹でもあった。』
18. 「戦国名将言行録」4（藤 公房）  
『伊達政宗……生母保春御前の生家最上家では義守が死に、兄の義光の代になっていた。』
19. 「米沢風土記」（米沢市編）  
『政宗は父輝宗の第一子として米沢城に生まれました。母は山形城主最上義守の女で、最上義光（よしあき）には妹にあたる義姫といい……』
20. 「みちのく歴史物語－米沢を中心に－」（田宮友亀雄）  
『政宗の母は、山形城主最上義光の妹ですが……』
21. 「日本武将列伝」（江崎俊平）  
『伊達政宗……母保春院が……兄最上義光と……』
22. 「伊達氏と最上氏」（豊原愛郎、「日曜随筆」通巻第129号の内）  
『天文15年〔1546〕に義守の長男義光が生まれ、……義光には彼より二つ年下の義姫という妹があったが、これが17歳で伊達輝宗にとつぎ……』
23. 「今に生きる政宗」（『朝日新聞』昭和4.1.5.17。「郷土の歴史」（仙台市観光課編）の内）  
『〔政宗〕母は山形城主最上義光の妹……』
24. 「伊達藩物語」（民友新聞宮城版昭和4.1連載130回。「郷土の歴史」（仙台市観光課編）の内）  
『政宗の母は最上氏の出、しかも義光の妹にあたる。』  
『政宗の母は……最上義光の妹義姫……』
25. 「さんさ時雨記」天正の巻（片平六左）  
『母義姫は政宗よりも弟の小次郎〔竺丸〕を愛し兄の最上義光と謀って政宗を廃嫡せんと……』
26. 「凶南の豪雄伊達政宗」（菅原兵治）  
『母の実家たる山形の最上義光（政宗の母の兄。随って政宗よりいへば実の伯父に当る）が、伊達家に対する外戚の権を振はんとして母を動かし、弟を立てんとする陰謀から、遂に彼を毒殺せんとしたのである。』
27. 「仙台領戦国こぼれ話」（紫桃正隆）  
『政宗の母、東の方、のちの保春院は若い時には義姫と称された。今の山形市の中心部に居城を構えた山形県〔？〕北東部の大名、最上義光の妹であった。』
28. 「伊達政宗」（海音寺潮五郎）  
『「最上義光という伯父〔母の兄〕ごがまたなかなかのくせ者じゃ……』
29. 「武将列伝」（海音寺潮五郎）  
『〔伊達政宗〕母刀目の実家の兄最上義光は……妹にこう説いた。』

30. 「伊達政宗」（鷲尾雨工）

『義光は、義姫夫人の兄君だった。』

31. 「独眼竜政宗」上、下巻（早乙女貢）

『かれ〔輝宗〕が討ち死にするようなことがあれば、義子と、その実兄最上義光がどんなに口をはさんでくるかもしれない。』

『「隠居する〔輝宗〕ことにする、で、政宗を家督させる」……義子は眼を光らした。……「実家〔最上〕の兄とも相談いたさねばなりません……」』

『去年は、義子は兄の最上義光と大崎のほうに働きかけて、和睦をまとめあげている。これも義光兄妹の手のこんだ陰謀かもしれないが、少なくとも表面的には伊達家のためになっている。…義子が兄の義光と話し合っ、ともかく、戦火をおさめたことが、政宗の南方進出を容易にしたことは否めない。』

32. 「伊達政宗」1、2（山岡荘八）

『嫡子の義光よりも、その妹の義姫の方が遥かにこの戦国を逞しく生きてゆける気丈者に思えて、  
「……そなたは気性で妹に劣るぞ」……』

『…兄の義光とは比較にならぬ強情さをもっている。』

『やはり気になるのは、母の保春院と、その兄の最上義光の連絡だった。』

『…山形の伯父御〔母の兄〕……』

『母は……山形の兄の城へ逃げ込んだのがわかった。』

33. 「伊達政宗」（永岡慶之助）

『保春院は実兄最上義光を頼って山形へ逃げた。』

34. 「伊達陸奥守政宗」（南条範夫、「歴史と旅」第5巻第7号の内）

『政宗の母保春院は最上義光の妹である。』

35. 「やまがたの峠」（読売新聞山形支局編）

『中山越え〔上山市〕……伊達・最上家の争いに業を煮やした義光の妹で政宗の母に当たる義姫が侍女らとともにこの藩境の道にカゴで乗りつけ、80日間〃座り込み〃を続けて両家を講和させたエピソードがある。』

36. 「伊達治家記録」1（平 重道編、P439、「貞山公治家記録」巻之6天正16年7月6日の条の編者頭注39）

『輝宗夫人最上氏は最上義光の妹であるが、年は2歳下にすぎず、両者はかなり意志が疎通していたようである。それだけ伊達・最上両氏の間に入った夫人の立場は苦しいものであった。なおこうした〔上掲 35.の事件、天正16年の伊達・最上両氏対戦の最前線中山に自ら乗り込み和平をとりつけたこと。『御輿を寄せられる』と「治家記録」は記す。〕夫人の活動を見ると、夫人は単なる閨内の人ではなく、政治的にも識見と活動力のあった人であることが推察される。政宗

と夫人との母子離別も、一つには夫人のもつ政治的な見解が、政宗のそれと一致しなかったことが原因である。この事件にもそうした萌芽を見ることができる。』〔上記第3類に挙げてあるように「姉説」をとる同氏が、「治家記録」本文〔天正18年4月7日の条『御弟最上出羽守義光……』〕をも無視して、この個所においてのみ正反対の「妹説」によっているのは、どういうことであろうか。〕

37. 「政宗に睨まれた二人の老将」（紫桃正隆）

『「お東方」……独眼竜政宗の母であり最上家当主義光にはたった一人の妹に当たっていた。』

『最上義光……最愛の妹……』

38. 「伊達家系譜」（天頌和尚編、「瑞巖寺博物館報」第5号の内）

『政宗……母最上義光妹也……』

以上の類別によって、第1, 2類資料は論外に置くとして、第3, 4類資料が対置されましたが、それらの当否を決するきめ手資料は、既存のものには全然ありません。そこで、全く別途な手法、すなわち、次のような計数的詰めによって問題の展開を図る以外にありません。これは、未だ曾て、何人も試みたことのなかった進め方でありませぬ。

1. 政宗の母公の歿年、行年は「貞山公治家記録」巻之23の記すところにより、  
元和9年〔1623〕7月16日歿、76才……①  
①により、その生年を逆算して求めれば  
天文17年〔1548〕生……②
2. 最上義光の生歿年については、「寛政重修諸家譜」巻10、「山形県史」第1巻（山形県内務部編、〔義光の歿年、行年のみを記載〕）により、  
天文19年〔1550〕生……③  
慶長19年〔1614〕1月18日歿、69才……④  
③、④を相互に検算し合う。まず、③から起算して歿年を求めれば、元和4年〔1618〕となり、記録にも歴史的諸事実にも合わぬから、③には誤りがあるので採るべきではない。そこで、生年を補正するため④によって逆算して求めれば、  
天文15年〔1546〕生……⑤
3. 義姫と義光との続柄を②と⑤から求めれば、  
②-⑤=2歳差の兄妹

故に、政宗の母公は、最上義光の妹であって、第4類の諸書に記されている続柄が正当なことになります。なお、第3類資料の採っている「姉弟説」は、上記のデータ②と③との単純な比較から生じたものといえます。

注(1) 「仙台人名大辞書」に

『輝宗公子。幼名は竺丸、母は保春夫人最上氏なり。天正16年元服す。18年4月5日

保春夫人政宗を招饗し、膳を進むるや、膳吏先ず嘗めしに忽ち目眩して血を吐く。公病と称して帰る（一説に、公毒に中りて吐瀉し、侍医錦織即休、撥毒円を進めて癒ゆと云ふは誤なり）7日公糺問して其実を得たり。乃ち小次郎を召して自ら之を殺す。曰く、母氏の罪は問ふべからずと。その傳小原縫殿定繼之に殉死す（治家記録に誅せらるるとあり）是夜保春夫人潜に山形に移る。初め夫人の弟最上義光、夫人に謂ひて曰く、政宗会津を取る、太閤大に之を、怒る。伊達氏の存亡亦た測るべからず。今に於て政宗を害し、小次郎を立てて以て太閤の怒を弛め、諸隣の怨を解き、長久の策を為さんに如かずと、其実は義光乗じて国を奪はんとせしなり。夫人察せずして遂に此の非謀に出でたり。小次郎法名を覚心圓公と云ひ、長谷寺殿と号す。墓は本吉郡横山南沢にあり。政宗公より七生の勘当ありしを、寛政5年3月7日齊村公継封の赦に之を免し、同村長谷寺に法会を修して代拝せしめらる。異本に卒日を4日とす。（治家記録）

注(2) もがみよしあき。〔仮名署名「よしあき」とある書簡現存する。「よしみつ」「よしあきら」「よしてる」等のルビを付けているものがあるが、いずれも誤まりである。〕

天文15年〔1546〕生。最上義守の子。通称二郎太。13代将軍足利義輝の偏諱を与えられて義光を名乗る。出羽国山形を居城とし、天正5〔1577〕天童の最上頼澄を討ち、上杉景勝・伊達政宗らと抗争した。天正18年〔1590〕小田原に赴き秀吉に謁し本領を安堵される。慶長5年〔1600〕関ヶ原の戦に徳川家康が西上すると、その子結城秀康を援け直江兼統の率いる上杉景勝の兵と戦う。戦後、功により上杉氏の旧領出羽国庄内を加えて57万石の知行となり、慶長16年〔1611〕左近衛少将兼出羽守に任ぜられた。慶長19年〔1614〕歿、69才。

注(3) だてしげさね。功臣。幼名時宗丸、通称藤五郎、兵部また安房守、後ち安房と称す。植宗の子実元を祖とする。母は晴宗の女。成実人となり英毅大略あり、勇武無双と称せられた。政宗側近にあつて勇戦殊勲を重ねた。文禄2年〔1593〕朝鮮の役から帰還、政宗に従つて伏見に在った時、ひそかに離脱して紀州高野山に入った。歴戦抜群の功績に対する行賞の不公平が積み重なつて、この挙をとらしめたという。政宗はその留守の居館角田に兵を遣はして、家族、家臣全員を攻め殺させた。慶長5年〔1600〕政宗が白石城を攻撃中、成実はその軍中に復歸した。同7年亘理に知行を受け、世々一門に列した。正保3年〔1646〕6月4日歿、71才。法諡は雄山院殿久山天昌大居士。亘理大雄寺に葬る。その著、「成実記」は、成実が一歳年長の政宗の無二の股肱として、戦国争乱の山野を馳驅し、自ら見聞体験した事実、即ち天正12年政宗が家督を継いだ時から筆を起し、慶長5年白石を攻略するまでの戦闘攻伐の実況を記したものである。「成実記」に次ぐ著述に「政宗記」12巻がある。政宗を最もよく知る成実の筆に成る政宗一代記ともいふべき書である。寛永9年6月起稿、寛永19年6月稿を終っている。毎巻末に記述の年月日署名



があって、執筆の責任を明示している。「成実記」,「政宗記」併せて政宗史料として欠くことのできないものとなっている。

注(4) 城中本殿の東方にその居館が設けてあり、そこに常住したのでこのように称される。

注(5) 唐の英雄李克用が片目であったことから、片目の英雄をこのように称する。「唐書」李克用伝に『僖宗時黄巢造反李克用破之時人以其一目眇而有勇号为独眼竜』とある。転じてわが国では「伊達政宗の異称」となった。

資料 貞山公治家記録巻之23(「伊達治家記録」2の内)

寛政重修諸家譜巻10(「新訂寛政重修諸家譜」第2巻の内)

山形県史第1巻(山形県内務部)

〔「政宗公治家記録引証記」十九に『慶長五年庚子、伊達上野介政景、山形へ出陣ノ時、黄門卿ノ母堂最上氏ヨリ、政景へノ状中ニ、「いでわのおやかに、おほせ候まじく候」(出羽守ノ母堂ノ姪、最上義光(ヨシアキラ)ナリ。)……』とある。姪〔てつ〕とは、女子がその兄弟の子をいう称で〔後には男子がその姉妹の生んだ子を称するようにもなった〕ある。政宗母堂と最上義光とはこのような統柄ではなく、編者のミスであるので採り上げなかった。〕

## 123 伊達政宗の法名

問 伊達政宗の法名を「瑞巖寺殿貞山禅利大居士」と書いてある本と、「瑞巖寺殿貞山利公大居士」と書いてある本があります。どちらが本当なのですか。

答 法名は、唯一のもので、一人について二様のものがあるべきではありません。しかし、伊達政宗の法名として、お尋ねのように両様のものが世間に通用しています。図書資料に現われているものを整理区分すると、次のようになります。

1. 「瑞巖寺殿貞山禅利大居士」とするもの

1) 「貞山公治家記録」巻之39下

『〔寛永13年6月4日条〕……御法名貞山禅利大居士 瑞巖寺殿ト号シ奉ル、保春院清岳和(1)尚導師タリ。』

2) 「伊達政宗卿伝記史料」(藩祖伊達政宗公顕彰会編)

『〔寛永13年6月4日〕遺骸ヲ仙台経ヶ峯ニ埋ム。瑞巖寺殿貞山禅利大居士ト法諡ス。』

3) 「伊達略系」(作並清亮、明治27。また「仙台叢書」第1巻の内)

『政宗公……法諡曰瑞巖寺殿貞山禅利大居士』